

「がんの時代を生ききる」最終回は、今年4月に中央病院院長に就任しました高橋道長先生が解説します。

皆さんは、胃がどのような働きをしているかご存じですか？

胃の働きは大きく分けて、①食べた物の貯留②殺菌③タンパク質の初期消化の3つです。胃は、摂取した食物を貯留・攪拌し、少しずつ十二指腸に押し出す役割を持っています。胃の壁細胞からは胃酸が分泌され、食物に含まれる細菌を殺菌するとともに、主細胞からはペプシンが分泌され、タンパク質の分解が始まります。胃を切除すると、これらの重要な機能が、多かれ少なかれ失われることとなります。

近年、日本人は年間約12万人が胃がん罹患するとされ、最近では内視鏡で腫瘍を切除できる早期胃がん症例が増えていることから手術による胃切除数は次第に減ってきており、昨年、胃切除を受けた人は約4.3万人と報告されています。

胃の切除法には、①腫瘍をその周辺の胃を含めて切除する胃部分切除術、②胃の出口の方（十二指腸側）を切除する幽門側切除術、③食道に近い方を切除する噴門側胃切除術、④胃を全て切除する胃全摘術などの術式があります。胃切除を受けた方が術後に被る病態を胃切除後症候群と呼びますが、今回は特にその病態と食生活に注目して、お伝えしたいと思います。

【胃切除後症候群と食生活】

①逆流性食道炎

胃の食道側が切除される胃全摘術や噴門側胃切除術を受けた方は、胃の逆流防止機能が失われます。そのため、十二指腸に分泌される胆汁や膵液が食道に逆流することによって、胸焼けや背部痛を伴う逆流性食道炎が発症することがあります。その治療には、膵液の作用を減少させる膵酵素阻害剤が有効とされていますが、さらに、できるだけ脂肪の摂取を制限し、夜遅く食事を取らないことなどが効果的です。

②ダンピング症候群

食べたばかりの未消化の食物が胃に貯留されず、そのまますぐに小腸に流入することによって起こる症状がダンピング症候群です。早期ダンピングと後期ダンピングに分けられ、食事摂取後30分程度で発症する目まい、頻脈、動悸、腹部不快感や悪心などを早期ダンピングと呼びます。一方、食後2時間ほどで発症する全身倦怠感、発汗、悪心などの低血糖症状によって起こるものを後期ダンピングといいます。1回の食事量を減らし、食事の回数を多くすることなどで、多くの場合徐々に改善していきます。内服薬によって改善することもあるので、主治医にご相談ください。

③胆のう結石症

胃切除のため胃酸の分泌が低下して、胆道（肝臓で生産される胆汁の通り道）感染が起こりやすくなります。胃切除の手術中に胆のうの周囲の神経を切離することが必要になることが多く、そのため、術後に胆のうの収縮機能が障害されます。これらの原因によって胆のう結石症が発生した場合は、胆のう切除が必要になる場合があります。

④骨粗しょう症

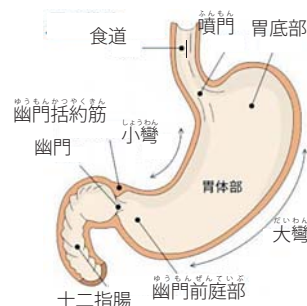
胃酸分泌の低下によるカルシウムの不溶化と吸収障害、およびビタミンDの吸収不良などによって骨から血中へカルシウムが移動し、腰痛や肩痛を伴う骨粗しょう症を発症することがあります。特に高齢者や痩せ型の人に多くみられることから、カルシウムの多い食事を取ることに加えて、カルシウム製剤やビタミン剤の服用も勧められています。

⑤貧血

胃切除後には、鉄の吸収障害によって起こる鉄欠乏症の小球性貧血や、ビタミンB12の吸収障害によって大球性貧血が起こることがあります。小球性貧血は術後早期から出現しますが、大球性貧血は、術後3年以上経過してから発症します。鉄を含む食事を取るよう心掛けるとともに、鉄剤の服用やビタミンB12の補充が必要になります。

当院では、胃切除を受けた方は、退院前に栄養士から食事指導を受けていただきますが、退院すると指導の内容を忘れてしまい、食事指導が守られないことがよくあります。また、胃切除後の再建術式によっても症状の出方に差があります。他にもいくつかの症候がありますので、不調のときには担当医にご相談ください。

(文責：中央病院
院長 高橋 道長)



これまで、各診療科の医師からそれぞれのがんについて解説してもらいました。普段と違う症状があったらすぐに医療機関を受診することや、定期的な健康診断を受診することで、がんを早期に発見し治療を行うことができます。

当院の健診センターでは、さまざまながん検診を行っています。中止していた胃内視鏡検査を8月から再開しますので、希望する人は健診センターまでご連絡ください。早期発見！早期治療！が大切です。

☎健診センター ☎⑤763 (予約受付時間：平日 午前9時～午後4時)